

スポーツ競技の上級審判員を対象とした判定に関する質的分析

齊藤 茂 (松本大学)

キーワード：審判員の判定，ストレス，審判員の姿勢，選手との関係性，インタビュー調査

【序論】

現代の各種競技スポーツにおいて「審判員」は必要不可欠な存在と言え、また、場合によっては彼らのたった1つの判定が試合結果を左右することさえある。昨今では、審判員の判定に関連する多くの問題が取りざたされるようになってきており、彼らを取り巻く現代の状況は、まさに「審判受難の時代」(一, 2007) であると言われている。その一方で、審判員を対象とした学術的な研究は数少ない。スポーツ心理学領域においても、見正 (1980) による Y-G 性格検査を用いてバレーボールの審判員の性格傾向を検討した調査、上野ほか (1992) によるバレーボールの審判員の心理的緊張度について心拍数をもとに検討を行った調査、伊藤ほか (2006) による少年サッカー審判員を対象としたその判定に関する意識調査、及び村上ほか (2015) によるトップレフェリーに必要な心理特性についての調査等が散見される程度である。

そこで本研究では、サッカー競技等の上級審判員を対象としたインタビュー調査を実施し、彼らにかかるストレスの発生機序について明らかにしたいと考えた。筆者はこれまでの研究 (齊藤・内田, 2016) で、審判員と選手間のコミュニケーションを通して、両者が相互に尊重し合う関係性の構築を図っていくことの重要性を選手の視点から明らかにした。そして、審判員による判定自体より、選手は選手側の意見を聞こうとしてくれるのかといった、審判員の“姿勢”を重要視していることを考察した。そこで今回は、「判定する側」の審判員の姿勢に着目し、彼らの姿勢が両者の“関係性”に与える影響に焦点を当てた分析を行うことにした。

【方法】

1. 対象者

Z 県、及び Y 県の現役上級審判員 3 名とした。

2. データ収集・分析

対象者のライフストーリーの聞き取りを中心とした 1 対 1 の半構造化面接を行った。面接は本人の了解を得た上で、全内容をボイスレコーダーで録音した。面接後文書化し、この際に個人が特定されないような配慮 (加筆修正) を行った。

面接調査の結果は、個人の内的体験の意味を考えつつ、研究目的に沿って選手との関係性に焦点を当てて面接事例として記述した。

【結果・考察】

分析の結果、選手との関係性を築くための審判員の姿勢として、「選手の力を引き出す」(対象者 A)、「選手の気持ちに添う」「ぶれない」(対象者 B)、及び「受け入れられる努力」(対象者 C) 等が見出された。

このように、高い評価を得ている上級審判員は、選手とよりよい関係性を築くために、選手を中心に据えた関係づくりを行っていることが明らかとなった。これはまさに、日本サッカー協会が 2008 年度より開始した「リスペクト宣言」に通ずる姿勢であり、審判員と選手がお互いをリスペクトする姿勢が必要であろう。

【主な引用文献】

一 正孝 (2007) スポーツでの審判について. 国学院大学スポーツ・身体文化研究室紀要, 39, pp. 17-20.

齊藤 茂・内田若希 (2017) 審判員の判定に関する心理学的考察：大学生サッカー選手を対象とした審判員の判定に関する印象調査. 松本大学研究紀要 15, pp. 37-49.

本研究は科研費 (18K10867, 研究代表者：齊藤茂) の助成を受けたものである。